H.D.ソロー著「森の生活(ウォールデン)」を読む

－自然と精神のありかたを考える－

岸辺の形状はかなり不規則だが、そのおかげで単調さをまぬがれている。私の脳裏には、深い入江のある出入りのはげしい西岸、それ以上に大胆な曲線を描く北岸、岬がつぎつぎと折り重なるように張り出し、まだひとが通ったことのない入江があるのではないかと思わせる美しい扇形をした南岸などが、つぎつぎと浮かんでくる。水ぎわからそそり立つ丘にぐるりを囲まれた小さな湖の中心部から眺めたときほど、森が絶好の場所を得て、すばらしく美しく見えることはない。そうした場合には、森を映す水がこのうえない前景となっているだけでなく、湖の入り組んだ岸辺が、森にとって、もっとも自然で快活な境界線となっているからである。森の一部分を斧で伐り拓いたり、すぐ隣に畑をつくったりした場合とはちがって、水ぎわには殺風景で不完全なところは微塵(みじん)もない。木々は水のほうへ伸びてゆくための空間を十分にもち、それぞれがとりわけ元気のいい枝をその方向に伸ばしている。「自然」はそこにみごとな縁(ふち)を織りなしているのだ。したがって、視線は岸辺の低い灌木からもっとも高い樹木へと、正しい段階を追って上昇してゆく。人間の手が加えられた痕跡はほとんど見あたらない。水は千年前とおなじようにその岸辺を洗っているのである。

湖は風景のなかで、最も美しく表情に富んだ地形的要素である。いわば大地の目だ。そこをのぞきこむ者は、自己の本性の深さを測ることになるだろう。水辺に生えている木々は、目をふちどる睫毛(まつげ)であり、森におおわれた周囲の丘と断崖は、目の上におおいかぶさる眉毛である。

薄い靄(もや)がかかって対岸線がかすんで見える、おだやかな九月の午後、湖の東の端にあるなめらかな砂浜に立つと、「鏡のような湖面」という表現のいわれがよくわかった。頭をさげて股のあいだからのぞいてみると、湖面は谷間に張りわたされた一本の細いクモの糸のように見え、それが遠くのマツの森を背景にキラキラと輝いて、大気の層と水の層とをまっぷたつに分けている。まるでその下を濡れないで対岸の丘まで歩いていけそうな気がするし、水面をかすめて飛ぶツバメも、そこに翼を休めることができそうだ。事実、ツバメはときどき、うっかりその線の下にもぐりこんでしまってから、はじめて自分の錯覚に気づくのである。

西に向かって湖面を見わたすときには、太陽とその反射光から目を守るために両手を使わなくてはならない。どちらもおなじくらいまぶしく輝いているからだ。この両者にはさまれた水面をつぶさに眺めわたしてみると、それは文字どおり鏡のようになめらかではあるが、湖面全体にわたって等間隔にちらばっているアメンボウが、日ざしのなかで動きまわりながら、水面に言いようもなく繊細な光の波紋を生み出しており、またあるときはカモが羽をととのえたり、あるいは今しがた述べたように、ツバメが水面すれすれに飛びまわったりしている。遠くのほうで、魚が空中に三フィートから四フィートの弧を描くこともある。魚がとび出す瞬間に閃光がきらめくかと思うと、水面に落ちたとき、ふたたび閃光が走る。ときには銀色の弧がそっくり出現することもある。あるいはそこにアザミの冠毛が浮かんでいることもあり、魚がそれに向かって突進すると、またもやさざ波が起こる。湖面は、冷

やされたけれどもまだかたまってはいない溶けたガラスのようなもので、そのなかにあるわずかな塵(ちり)は、ガラスの中の瑕(きず)のように純粋で美しい。また、ひょっとすると目に見えないクモの巣によってほかの部分から隔離され、水の妖精たちが憩いの場として使っているのではないかと思われるような、ひときわなめらかで翳(かげ)りを帯びた水面を見つけることがしばしばある。

丘の上からだと、どこで魚が跳ねてもたいていは目にはいる。カワカマスにしろシャイナーにしろ、このなめらかな水面に浮かぶ虫を一匹でも捕らえようとすれば、湖全体の平衡を大きくかき乱さずにはおかないからだ。こんな単純な出来事が細大漏らさず公(おおやけ)にされてしまうのだから、おどろくほかはない。 P.28 ～ 30

列車はこの湖を眺めるために停車したりはしない。けれども機関士や火夫や制動手、それから定期券をもっていて湖を日ごと目にしている乗客たちは、この景色を見ることによって人間的にいちだんと向上しているのではないかと私は思う。機関士――あるいは彼の本性――は、日中に少なくとも一度はその澄みきった純粋そのものの風景をまのあたりにしたという事実を、夜になっても忘れることはあるまい。たとえ一度しか見ていなくても、それはステート街や機関車の煤(すす)を洗い落とすのに役立つ。いっそこの湖を「神の滴(しずく)」と名づけることにしてはどうだろうか。 P.42

H.D.ソロー著、飯田実訳「森の生活(ウォールデン)下」
岩波文庫、岩波書店 1995 年 9 月 18 日刊
－ 2006 年 9 月 25 日記－